

ほんと」とあたりかまわず喜びの声をあげました。子どもたちみんなと同じ目標に向かって走り、それが達成でき共通の喜びをみんなで体験できたこと、これはほんとうに忘れがたい思い出です。かりに私がひとりで動物園に来て同じように動物を見出した時に比べ、たぶん何倍も喜びは大きいにちがいありません。一年間共に生活し、遊び、悩み、悲しみ、喜びあった子どもたちといっしょですから。

この写真を見ると、ひとりひとりのいろんな場面が思い起こされます。ファミリーみんなで、あんなことも、こんなこともあったとなつかしく思い出されます。

私は、クラスの先生になること、担任の先生になることが、長い間の夢でした。保育第一日目にして、この子どもたちと離れる時、どんな思いがするのだろうかと思うほど、手ごたえのあったことを思い出します。保育園の先生は、子どもたちと一日の長い時間をいっしょにすごします。私が八時半に来るまでに、もうすでに数人の子どもたちが来ています。「先生遅かったわね」と言われる

こともあります。そして夕方遅い子どもは六時半まで園にいます。私がそうじを終わるのが五時半から六時頃です。子どもの状態が悪かったり、気にかかる時、また寂しがったりして「先生帰らないで」と言われる時は、お母さんが来るまでいっしょにいます。次の日の保育準備や環境整備、子どものことを考えたり、記録をつけてふりかえる時間は、もう少ししかありません。大変さはありますが、保育園であるからこそ、子どもとの深い体験が可能であることも事実です。今回は二人の男児の歩みを追ってみたいと思います。

一 年長男児T君のこと

(1)叱られて泣く 五月二十七日

食事の時間になり、何回も声をかけてもTは室内に入ってこない。Tは今日配膳のお当番である。私は戸をしめてしまう。Tはあわてて部屋に入ろうとし、ドアで頭をぶつけてしまう。Tは泣き出す。私はいたく

したTの頭をなでながら、「戸で頭を打ったからなの？」と聞く。T「ちがう。」「先生にしかられたから」と言う。そしてTは私の腕の中でしばらく泣く。

五月も下旬になり、子どもたちは自分を出してくれるようになった。しかしその反面、なかなかこちらの言う通りには動いてくれません。食事の時、また午睡の時、みんながいっしょに集まって行動する時は大変である。私は子どもの気持ちを受けとめる余裕がなく、あれもこれもと頭が乱れる。この日ももう少しゆとりを持ってTとかかわれば、戸をしめるなんてしなかったと反省する。当番が決まっても、友だちのことをやってあげる以前に、Tは自分のことで精一杯である。自分が充分満足して遊ぶことがまだまだ大切な時であったのだ。Tは気持ちが悪く落ち着かないと、フラフラと歩きまわることがあった。また理由なく友だちをパンチしたり、キックしたりすることが多く、友だちを泣かせ、子どもたちにいやがられることもあった。午睡の時、ひとりですとん

に入ってベッベツとつばをとばしていた。どうしてあんなことをするのかと思っていた。ところが、この日私に叱られ私の腕の中で思いつき泣いて以来、ベッベツとつばをはく行動をピタツとしなくなった。私の方も、Tがぐっと身近な存在に感じられ、おんぶもよくするようになった。

私が七月中旬に、四歳児の一泊保育の引率をして帰ってくる時、T「僕心配してたよ」と言いました。私「何を？」とたずねると、「川上先生と黄色バッジ（四歳児）さんのこと」と言いました。ほろっとし、疲れた顔もほころびました。また、年長児の海浜保育で、私は駅まで見送りに行きました。しばらくすると、T「先生もういいよ、黄色さんが寂しがっているから」とやさしい発言をしてくれた。

(2)「きかんしゃやえもん」と「ちいさいおうち」

子どもたちの会話を聞いてみると、テレビの話題が多い。私の子どももテレビが大好きでよくテレビを見たが

る。しかし、テレビの内容がお粗末なものもいくつかある。子どもはケラケラ笑うが、安直な笑いもある。また子どもがゲームを番組の中でしているのを見て楽しむというのも、私は疑問を覚える。そんなことを常々思っていた。子どもが自分で感じる心、感動する心を持ってほしいと願っていた。それで、私が「いいな」と思う絵本をできる限り読んで聞かせた。また私が経験したり、見聞きしたことで、すばらしかったこと、また美しかったこと、ほんとうに悲しいこと等をことあるごとに話した。

『ちいさいおうち』もそんな思いで読んだ。私が読み進んでいき、ちいさいおうちがまわりのビルや鉄道や人々に囲まれ、だんだん見えなくなっていくと、T「かわいそう」「許せない」と言い出した。いなかが開発されていき、そのために失われていくものに対し、好ましくないと感じている。翌々日、今度は『きかんしゃやえもん』の絵本をやはり午睡時に読んで聞かせた。みんなよく聞いていた。読み終わり、私は、「おととい読んだ

『ちいさいおうち』とこの本と、どこか似ているかしら」とみんなにたずねてみた。するとまずはじめに、「かわいそうなところ」と言いました。それから、「最後にそうじをしてもらいきれいになったところ」と言う子どももいた。しばらく考えた後、「最後に人に助けられたところが同じ」と考えついた子どももいた。Tは、「古いものはがんじょうなこと」と気づき、私は感心した。

(3)「どうせ相手にしてくれないんだから」

二学期になると、Tが友だちをパンチしたりすることは減った。Tの正義感が許さない時は、思わず手が出ることはあったが、一学期のように、理由なくパンチをすることはなくなった。運動会やクリスマス会の大きな行事には、自分の役をしっかりとやることのできた。役が決まっていることに対してはがんばるのであるが、友だちの中で遊んだり、友だちを誘って遊ぶことは少なかつた。私がTに「何して遊ぼうか」とたずねると、Tは

「サッカーしたい」と強くいう。私が「じゃ友だち誘おう」と言う。でもTは、友だちに声をかけることができず、「どうせ僕のこと相手にしてくれないんだから」とあきらめてしまう。私はこれは放っておけないと思い、Tが好きなサッカーを、友だちをさそってよくやった。サッカーをやっているうちに、遊びがもり上がる前にTは黙ってぬけてしまいそうになる。そんな時、私は励まし、Tがやめたらお友だちもつまらなくなることを知らせる。そして思いっきり体を動かし、友だちと遊ぶことの楽しさがわかるように私は遊びをもり上げていった。

(4)友だちと遊ぶ

三学期に入り、同年令の子どもといっしょに遊ぶ姿が見られるようになった。当番活動も一学期は仕方なくやっていたのだが、三学期になると、自分から抵抗なくやっている。気持ちも安定し、萎縮せず、じっくり遊びに取りくんでいる。二月に年長児は科学博物館に行った。私は行かなかったが、驚きと感動を覚えたようだ。

翌日私は粘土を出してみた。すると男児のT、H、Kがさっそく前日見てきた恐竜を作り始めた。三人は三様に力強い恐竜の作品をじっくり時間をかけて作り上げた。Tは太い足でがっちり地面に立ち、広い背中をもった恐竜で、いかにもたくましくそんなものであった。三人が作り終えると、外に出て三人で相談して、網をはりバレーボールのような遊びを考え出し、遅くまで遊んでいた。Tは友だちと遊べるようになった。Tの問題が解決したことを目のあたりにし、うれしかった。

三学期になると、帰りの時間に当番さんが相談して出席ノートを配るようになった。配り方はさまざまで、なぜか答えられた人からとか、じゃんけんで勝った友だちからとか、子どもたちが遊びを考えた。Tが当番になった時、自分とすもうをとり、勝った友だちから出席ノートを渡すと考えついた。私はTに、「T君は強くって、おすもうに勝てるお友だちはそんなにいないわよ」と言う。するとTは、「大丈夫、加減するから」という。ところがおとなしい女兒UとTがすもうをとると、

Uが負けて泣き出してしまった。すると年長児K(前
述)が、「僕がUちゃんのかわりにおすもうしてあげる
よ」と申し出る。小柄なKは、大きなTを相手におすも
うをとる。すがすがしさを覚え、育ったなとほほえまし
く思った。

二年中男児S君のこと

(1)「僕は重くないもの」 六月十三日

私はピアノの上に時計を置いていた。それを四歳男
児Oがかまう。それをSが「だめだ」とがめ、Oの
顔をひっかく。Oは血がひどく出る

Sは、自分の心の状態が悪くなると、弱いOが気に
なって仕方がない。記録のようなささいなことでも「い
けないんだ」とがめ、つい暴力をふるってしまふ。O
はまたちよっとしたことでも泣き、一日に泣かない日にな
い程である。Sにどうしてなのと理由をたずねると、

「僕は悪くない、Oが悪い」と言い、そう思いこんでい
る。そんなトラブルが数日続き、主任先生はOにしかか
りがんばるように励まし、Sととっくみ合いをさせた。
体力のあるSは、すぐOを負かしてしまう。何回やって
もOは負けてしまう。今度は同年令で一番強いAが相手
になるように主任先生がしむけた。しかしSは負けるの
がわかってか、全然Aに向かっていかない。弱い子ども
をいじめる子どもが一番弱虫であると主任先生にしから
れたが、Sはわかっただろうか。

(2)「友だちがいなんだもん」

Sは食事の時間になるが、なかなか部屋に入ってこな
い。やっと部屋に入ってきた時には、すでに他の子ども
たちは席について食事の用意をしている。Sは、「B君
のとなりにすわりたい」という。しかし、もうBの両側
は別の子どもたちがすわっていて、Sとかわってあげる
つもりはないという。Bの五つ先にひとつ席が空いてい
る。でもその席だといやだとSは言う。私は「じゃどう

すればいい？」とSにたずねる。するとSは、「空いている席のとなりの子どもが空いている所にすわり、Bのとなりの子どもまで、ひとつずつずれていけばいい」という。Bのとなりを空けるために、他児五人がひとつずつずれればいいのである。私も、それを聞いていた子どもたちも、「そんなかってな」とあきれ声で言う。私はSをだいて、「そんな自分かってなことしたら、お友だちいやがるわよ」と話す。するとSは、「僕友だちいないんだもん」とワーと私の腕の中で泣き出してしまった。自分本位、自分の都合だけを考えるSは、まわり子どもたちもそのことがわかり、相手にしてもえなくなっていた。Sはそうしたなかで、Bとなんとか友だちになろうと気を使っていた。母親も家にSがいる時、Bと遊ぶ機会を作ったりして配慮していた。しかし、興味が互いに異なるし、不自然なことで、うまく友だちにはなれなかった。Sは自分の思いを通したいし、友だちがほしいというジレンマでつらかったようだ。Sはいやなことがあると隅っこにうずくまり、すねる。友

だちの遊びに入れないで、床にゴロゴロしていることもあった。Sは自分の力が発揮されると、ことばの表現も豊かで、描画も楽しいものが描けるのだが。

(3) 「はずかしい」 十二月二十二日

食事の準備をする時、Sは同年令男児Mといすのとりっこをする。まわり子どもたちは、じゃんけんしたらいいとか、いろいろに助言をするが、二人とも耳に入らない。結局Mが泣き泣きSにいすを譲る。Sは部屋を出てテラスに行き、そこでうずくまって入ってこない。するとMがドアを開けて、Sに「いす置いてあるよ」と誘いに来る。他の子どもたちも部屋の中に入るように誘いに来る。しかしSは入らない。しばらくして私はSの所へ行く。私「どうして入ってこないの？ みんな待ってるわよ」と言う。すると、Sはうつむいたまま小さな声で「はずかしいから」という。私はSをつれていっしょに部屋に入る。するとまわり

の子どもたちが、「ここにおいでよ」と何人も席を空けてくれる。

自分本位な考えをするSであったのに、他児の譲る気持ちにふれ、またまわりの子どもたちの誘いにふれ、Sは自分が恥しいと思えるようになった。Sが気づくまで半年かかった。まわりの子どもたちやMが育っているなと思い、うれしかった。そして、その子どもたちにもまたSも育てられたのだなと感慨深かった。

三学期になり、Sはもう友だちのことで困ることはなくなり、自分らしくのびのびと遊べるようになった。私をはじめのとっかかりをつけてあげれば、Sは子どもたち同志でゲーム遊びや集団遊びをすることができるようになった。ころがしドッジで不本意にも当てられ、その場にうずくまってしまう。私はあえて放っておく。しばらくするとSは自分で立ちなおし、立ちあがってまた遊びを続けることができた。Sは成長し、強くなったことを知ることができる。

またはじめの写真を見ました。どの子どもも笑っています。一年間のその子どもなりの成長をとげ、その屈託のない笑いの中には、自信と希望が感じとれます。私もこの子どもたちと一年間をすごし、人として育つことすばらしさと喜びを実感することができました。これは私の大切な心の宝物です。

